

2017年8月10日

四国電力
取締役社長 佐伯勇人 殿

伊方原発をとめる会
事務局長 草薙順一

「命より採算優先」をやめ、伊方原発の停止・廃炉を求める申し入れ

伊方原発3号機の再稼働が強行されて1年になる。四国電力は、地震動が過小に評価されているという専門家たちの意見を無視し続け、住民の命と暮らしを危険にさらし続けている。私たちは、3号機の運転を直ちに停止し伊方原発を廃炉に向かわせるよう強く求める。

使用済み燃料プールについては、現状でも、廃炉に向かう上でも対策が急がれる。福島原発事故では、水が抜けてしまった場合に、使用済み核燃料の温度が上昇して燃焼し、列島を分断する大災害が危惧されていた。実際、原子力安全基盤機構の資料にも、核燃料を覆うジルコニウムは827℃を超えると燃え始めるシナリオが掲載されている。

使用後間もない燃料やMOX燃料は発熱量が大きいいため、水で冷却するしかなく乾式には移せない。核燃料のプールは、強い地震にも、航空機衝突にも壊れない強度を持たせる必要があるし、冷却設備も多重化する必要がある。この対策を放置しているのは深刻重大である。

貴職は7月末の原子力規制委員会で、原発運転期間40年について「妥当性議論」を求め、会合後には「運転停止中も含め40年とすることに疑問を呈した」と報じられている。もはや廃炉しかない2号機について、追加安全対策工事なしに40年を超過して運転する道を探っているとしか思えない言動である。「命より採算優先」の傲慢な論理であるばかりか、全国民に危機を拓げる暴論という他ない。

原発を運転する限り、使用済み核燃料が増え続ける。その処分方法は確立していない。世界では、自然エネルギーへの転換が進んでおり、基本的に燃料代が不要で安全に廉価に発電できる仕組みが急成長している。貴職には、住民目線に立って、安全と将来に目を向け、原発を断念する決断が求められている。原発にしがみつく限り、安全神話が頭をもたげ、取り返しのつかない事態をまねく泥沼に入り込むのである。

伊方原発3号機の運転強行及び「命より採算優先」の暴論に対し、私たちは満身の憤りをもって抗議する。伊方原発の稼働を断念し、伊方原発を廃炉に向かわせるよう強く求める。